

—目次—

1. 序文
2. <イスラーム思想と過激集団の系譜>
 - ・神の使徒:ムハンマド(570年頃～632年)
 - ・13世紀の宗教指導者:イブン・タイミーヤ(1268年～1328年)
 - ・ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブ(1703～1791)
3. <ジハード(聖戦)へのイデオロギー>
 - ・サイド・クトゥブサイド・クトゥブ(1906年10月9日～1966年8月29日)
 - ・第三次中東戦争(1967年=6日間で終わったため「6日戦争」とも言われている)
 - ・ウサーマ・ビン・ムハンマド・ビン・アワド・ビン・ラーディン(1957年3月10日～2011年5月1日)
4. <2001年9月11日ニューヨーク同時多発テロにおける疑問>
5. <ISIS (Islamic State of Iraq al-Sham:ダーイシュ)の抬頭>
 - ・アブー・バクル・アル=バグダーディー (ISISの指導者、自称カリフ)
6. <イスラーム思想と今後の世界との関り>
7. <開けられるパンドラの箱>



—序文—

今、世界中でムスリム世界(イスラーム教を信仰する人々)とのパワーバランスが崩れ、様々な軋轢が生じています。日本でもアルジェリアで、そしてシリアで、大きな問題が発生し、否応なくこの問題に直面しています。これらの諸問題を日常的な意識をもって理解し、正しい論議をしなければなりません。

本稿は、前半はイスラーム教に於ける一つの枝葉「過激派テロリズム」を育てる宗教的イデオロギーの流れを形成してきた代表的な人物とイデオロギーの流れを紹介しています。

開祖、神の使徒(ナスール)とされるムハンマド(570年～632年)がメッカ(文中はマッカ:サウジアラビア)でその布教活動を始めた時は、身内を含めた50人足らずの人々によってでした。そのイスラーム教の信者は今日15億人を超える信者を抱え、なおその信者の数は増加しています。これは何故でしょうか。

アメリカを中心とする西欧国家や日本などは、中東に産出する石油資源を求め、ムスリム圏に土足で踏み込み、それらの利権を買いあさりました。土足でかの地を踏み荒らすだけではなく、ムスリムの人々から見れば墮落と表現されている様々な文化や生活態度を持ち込みました。このころの日本人を評して「エコノミック・アニマル」と言われていました。「経済利益だけを追求する野獣」「お金、女性、ギャンブル等欲望だけをむき出しにした野獣」という意味でした。ムスリム国家ではお酒や売春をすることはご法度でした。ゴルフやマージャンに日中から夢中になるのは、程度の低い人間であり、遊ぶということは子どもだけに許される行為だという観念が根強く残っていたのがムスリム社会でした。

石油利権の為に支配層の王族達をとりこみ、多額の利益を彼らにもたらし、国家支配体制を確立させたのも、西欧の先進国でした。そして今日なおその影響下にあるムスリム国家は少なくありません。支配層は王侯貴族の暮らしを保証され、99%の人々は日常の暮らしに追われて生活しなければなりません。支配形態に民主化が行われている国はごくわずかで、未だ女性の参政権が認められていない国も少なくありません。

2010年・チュニジアから始まった「アラブの春」は、これまでの旧支配体制に対する市民の民主化を求める熱い思いが結集され、市民運動が中東全体に広がって行ったのです。チュニジア、エジプト、レバノン、イエメン、オマーン、そしてシリアと飛び火していきました。しかしシリアではアサド大統領の強権力による軍事弾圧が徹底を極め、民主化を求めた自由シリア軍(FSA)は手持ちの銃器で市街でのゲリラ戦を中心としてアサドに抵抗しました。即座にアサドは市民を含む無差別爆撃を開始し、今では30万人以上のシリア市民がアサドの手によって殺害されました。本文中でも紹介していますが、アサドは化学兵器を一般市民に対して使用したのです。

後半部分では、今後のムスリム国家と世界を含めた世界平和を如何に実現して行くかについて書いています。人類の位置する現在の姿を中心に、過去と未来を繋ぎ、如何に世界全体が平和になることが出来るかという課題に言及しております。そして宗教と民族、国の存在意義を包括的に解決するためには、決して避けて通れない大きな「パンドラの箱」をも開けなければなりません。

＜イスラーム思想と過激集団の系譜＞



●神の使徒—ムハンマド

ムハンマド・イブン＝アブドゥッラーフ・イブン＝アブドゥルムッタリブ (المطلب عبد الله بن محمد) Muhammad ibn `Abd Allāh ibn `Abd al-Muṭṭalib)で、「アブドゥルムッタリブの息子アブドゥッラーフの息子ムハンマド」の意味。字義は「より誉め讃えられるべき人」(570年頃～632年6月8日没)。

イスラーム教の開祖、軍事指導者、政治家。アラビア半島中西部、ヒジャーズ地方の中心都市メッカの支配部族であるクライシュ族出身で、その名門ハーシム家のひとり。イスラーム教では、モーセ(ムーサー)、イエス(イーサー)その他に続く、最後にして最高の預言者(ナビー)でありかつ使徒(ラスール)とみなされている。また世俗君主・軍人としても有能であり、アラビア半島にイスラーム国家を打ち立てた。

商人となり、シリアへの隊商交易に参加。25歳の頃、富裕な女商人ハディースジャに認められ、15歳年長の寡婦であった彼女と結婚した。ムハンマドはハディースジャとの間に2男4女をもうけるが、男子は2人とも成人せずに死んだ。

▲610年8月10日、悩みを抱いてマッカ郊外のヒラー山の洞窟で瞑想にふけていたムハンマドは、そこで大天使ジブリール(ガブリエル)に出会い、唯一神(アッラーフ)の啓示(のちにクルアーンにまとめられるもの)を受けたとされる。その後も啓示は次々とムハンマドに下され、預言者としての自覚に目覚めたムハンマドは、近親の者たちに彼に下った啓示の教え、すなわちイスラーム教を説き始めた。最初に入信したのは妻のハディースジャで、従兄弟のアリーや友人のアブー・バクルがそれに続いた。

▲613年頃から、ムハンマドは公然とマッカ(メッカ)の人々に教えを説き始めるが、アラビア人伝統の多神教の聖地でもあったマッカを支配する有力市民たちは、ムハンマドとその信徒(ムスリム)たちに激しい迫害を加えた。伯父アブー・ターリブは、ハーシム家を代表してムハンマドを保護しつづけたが、619年頃亡くなり、同じ頃妻ハディースジャが亡くなったので、ムハンマドはマッカでの布教に限界を感じるようになった。

▲ムハンマドはマッカをイスラムの聖地と定め、異教徒を追放した。ムハンマド自身はその後もマディーナ(メジナ)に住み、イスラーム共同体の確立に努めた。さらに1万2000もの大軍を派遣して敵対的な態度を取るハワーズィン、サキーフ両部族を平定した。以後、アラビアの大半の部族からイスラムへの改宗の使者が訪れアラビア半島はイスラムによって統一された。またビザンツ帝国への大規模な遠征もおこなわれたが失敗した。

▲632年、マッカへの大巡礼(ハッジ)をおこなった。このときムハンマド自らの指導により五行(信仰告白、

礼拝、断食、喜捨、巡礼)が定められた。大巡礼を終えてまもなくムハンマドの体調は急速に悪化した。ムハンマドはアラビア半島から異教徒を追放するように、自分の死後もコーランに従うようにと遺言しマディーナの自宅で没し、この地に葬られた。彼の自宅跡と墓の場所はマディーナの預言者のモスクになっている。

＜イスラーム教に於ける言語解説＞

シャリーア(アラビア語: شريعة Shari'a)は、コーランと預言者ムハンマドの言行(スンナ)を法源とする法律。1000年以上の運用実績がある。ローマ法を起源としないイスラム世界独自のものである。イスラム法、イスラーム法、イスラーム聖法などとも呼ばれる。

シャリーアはコーランと預言者ムハンマドの言行(スンナ)を法源とし、イスラム法学者が法解釈を行う。コーランを解釈するための学問体系(コーラン解釈学)も存在し、預言者ムハンマドの時代から1000年以上、法解釈について議論され続けている。法解釈をする権限はイスラム法学者のみが持ち、カリフ(ムハンマド亡きあとの最高権威者)が独断で法解釈をすることはできないとされる。預言者ムハンマドの言行録はハディースとよばれ預言者の言行に虚偽が混ざらぬように、情報源(出典)が必ず明記される。

シャリーアは民法、刑法、訴訟法、行政法、支配者論、国家論、国際法(スィヤル)、戦争法にまでおよぶ幅広いものである。シャリーアのうち主にイスラム教の信仰に関わる部分をイバーダート(儀礼的規範)、世俗的生活に関わる部分をムアーマラート(法的規範)と分類する。イバーダートは神と人間の関係を規定した垂直的な規範、ムアーマラートは社会における人間同士の関係を規定した水平的な規範と位置づけられる。また、イスラム共同体(ウンマ)は、シャリーアの理念の地上的表現としての意味を持つとされる。

シャリーアが六法全書と国際法を合わせたような性格を持つようになったのは、預言者ムハンマド自身が軍の指揮官であり国家元首であったことが大きく関わっている。

＜ジハード(聖戦)へのイデオロギー＞

●13世紀の宗教指導者であったイブン・タイミーヤ(1268年～1328年)。

イブン・タイミーヤは神と人間の絶対的異なるを唱え、人間はイバータ(神への奉仕)を行うことを最高の責務であると唱えた。シーア派やギリシア哲学の影響を受けたイスラーム神学と神秘主義(スーフィズム)に反対し、その影響を排除することを唱えた。そのために、彼はシャリーアの絶対性を唱え、クルアーン(コーラン)とスンナこそが信仰の基本であり、このふたつをシャリーアの法源の第一とすべきであるとし、また、シャリーアの厳守と完全な実施がイスラム国家の指導者の義務であると主張した。シャリーアの機能には社会の安定が不可欠だと考え、マムルーク朝などの軍事政権には社会的安定を存立の条件として求めていた。反対にイスラム国家であってもこの義務を果たさない国家及び指導者は、出自や資質を満たしても正当な指導者とは認められず、彼らに対するイスラム教徒の戦いにはジハード(聖戦)が成立するとするファトワーを出してこれを正当化した。

※ファトワーとは、ムフティーと呼ばれ、ファトワーを発する権利があると認められたウラマー(イスラム法学者)が、ムスリム(イスラム教徒)の公的あるいは家庭的な法的問題に関する質問に対して、返答として口頭あるいは書面において発したイスラム法学上の勧告。

●ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブ(1703～1791)

イブン・タイミーヤを師と仰ぎ、アッラーの絶対的権威をのみ認める。

＜ワッハーブ派の三大理念として以下のものがある＞

★タウヒード(＜一神教の原理＞を意味すると同時に、世界観と存在論、価値観の根本)の宣教

★勸善懲悪の実践

★シャリーア(イスラム法)の厳格な施行

◆ワッハーブ派はこれら三大理念の実施の結果、極めて厳格なシャリーア(イスラム法)の遵守と男尊女卑、聖地の聖廟の破壊などを行っている。

- アッラーを除き、全ての崇拜対象は虚偽であり、それらを礼拝する者は、死に値する。
- 多くの人々は、アッラーを信じず、聖人の霊廟訪問により神の恵みを受けようとしているが、これは虚偽である。
- アッラーだけが人間の全ての秘密を知っているため、祈祷での預言者、聖人、天使等の名の言及は、多神教の徴候とされる。
- クルアーン及びスンナの規定に基づかなければ、何も認めてはならない。
- タビル(起源、最初への回帰)の方法、つまり、理性的又は象徴的・比喩的解釈の方法により、クルアーンを解釈することは禁じられる。
- 人間が意思の自由を持ち得るとの主張は、異端である。
- ムハンマドは、審判の日にアッラーから赦しの許可を得る(スンナ派は、既に赦されていると考えている)。
- 女性は、過度に慟哭するため、埋葬地を訪れる権利を有さない。
- ムスリムは、以下の4つの休日だけを遵守すべきである。

イード・アル＝フィトル(バイラム祭): ラマダーン月の断食終了を記念した斎明けの祝日

イード・アル＝アドハー(クルバン・バイラム): メッカ巡礼(ハッジ)終了日の犠牲祭

アーシューラー: 断食潔斎の日

ライラトゥ＝リ＝ムバラカ(権勢の夜): 全ての生物及び植物界がアッラーフに服従するラマダーン月の神秘の夜

- 預言者の誕生日を祝ってはならない。
- モスクに奉納することは禁じられる。



●サイイド・クトゥブサイイド・クトゥブ (アラビア語: قطب سيد; sayyid qutb, 英語: Sayyid Qutb, 1906年10月9日～1966年8月29日)は、エジプトの作家、詩人、教育者、イスラム主義者。1950年代～1960年代におけるムスリム同胞団(エジプト)の理論的指導者。

弟のムハンマド・クトゥブ(Muhammad Qutb, 1919年～2014年)は彼の思想を著作を通じて広く紹介し、反世俗主義を唱えてオサマ・ビン・ラディンらイスラム過激派の思想の原動力となった。



▲1948年、教育システムの調査のためアメリカ合衆国に派遣された。最初の数ヶ月はコロラド州にあるコロラド州立教育大学(現在の北コロラド大学)に学んだ。アメリカ滞在中にクトゥブの最初の宗教的社会批評の理論書『الإسلام في الجماعة العادلة Al-'adala al-Ijtima'iyya fi-l-Islam (イスラムにおける社会正義)』が出版された。クトゥブは生涯を通じて呼吸器系の疾患など健康に恵まれなかった。また生来、内向的で孤独で、鬱んでいるときが多かった。人前に出るときは蒼白でいつも眠いような目をしていて、クトゥブはエジプトの女性は西洋化が進むほど抑圧的な境遇に置かれていると考えていた。

▲クトゥブはアメリカで教育行政を深く学ぶためにスタンフォード大学など数々の学校に通った。また各地を精力的に旅した。これらの経験がクトゥブの思想に多大な変革をもたらした。エジプトへ帰国する途上、クトゥブはヨーロッパも旅をし、そこで『The America That I Have Seen: In the Scale of Human Values (私が見たアメリカ)』という本を出版した。その中でクトゥブはアメリカの物質主義、個人の自由、経済システム、ファッション、人種差別、スポーツへの熱狂、美的欠如、性的な退廃、新生国家であるイスラエルへの肩入れなど多くを辛辣に批判した。彼の批評はアメリカ人の離婚への規制、表面的な人間関係、中味のない会話、アメリカ人女性のセクシュアリティなどにも向けられた。結局、クトゥブにはアメリカ文明の諸要素は激しすぎ原始的に思われ、アメリカ人は何よりも信仰や美や精神的価値について不誠実すぎる、と結論付けた。アメリカでの経験がクトゥブを西洋文明への拒絶に向わせイスラム主義へ進む動機となった。

▲エジプトに帰国すると教育省を辞職し、1950年代にクトゥブはムスリム同胞団に加わった。ムスリム同胞団の機関紙『المسلمون الإخوان Al-Ikhwan al-Muslimin (ムスリム同胞)』の編集長となり、後にムスリム同胞団の最高会議のメンバーとなりプロパガンダの責任者となった。

▲1952年、ガマール・アブドゥン＝ナーセル率いる自由将校団がクーデターを起こして親西欧的な政権を打倒した。クトゥブは帝国主義な立憲君主制が崩壊したことを歓迎した。しかし、クトゥブらムスリム同胞団が期待したようなイスラム国家樹立へとナーセルは向わず、クーデターを成功させた自由将校団とムスリム同胞団の共闘は破綻、1954年、ムスリム同胞団はナーセル暗殺未遂事件を起した。ナーセルは

ムスリム同胞団弾圧を進め、クトゥブも投獄された。クトゥブは獄中の最初の 3 年間、激しい拷問を受けた。

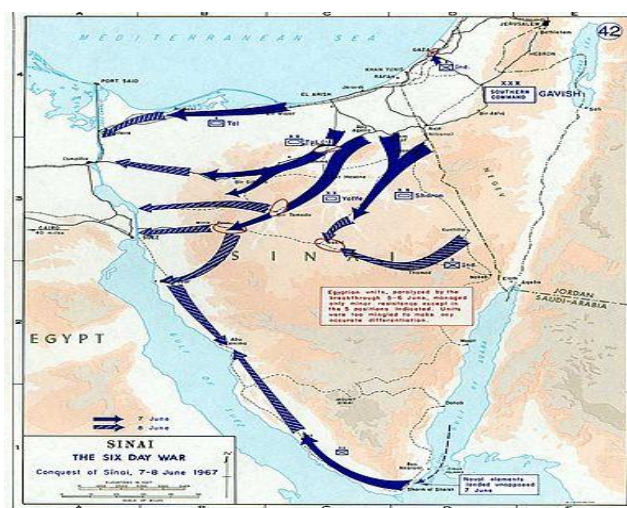
▲やがて多少の自由が与えられるとクトゥブは著述に入り、クトゥブの最も重要な思想書の 2 冊が獄中で記されることとなった。注釈書『القرآن ضلال في (クルアーンの陰)』とイスラム主義のマニフェスト『معالم الطريق في (道標)』である。クルアーンのクトゥブ的な解釈とイスラムの歴史やエジプトの抱える社会的政治的諸問題の分析を通じて反世俗的で反西洋的なクトゥブの思想が体系化され、『道標』によって現在のジャーヒリーヤ論が主張された。クトゥブはイラク大統領のアブドゥッ=サラーム・アーリフの後ろ盾で 1964 年に釈放されるも、8 ヶ月後の 1965 年 8 月に再逮捕された。国家転覆を謀った容疑で裁判にかけられ、ナーセル暗殺未遂事件の首謀者として死刑宣告を受け、1966 年 8 月 29 日、クトゥブは絞首刑に処された。現在では大統領ら要人暗殺計画にクトゥブは関与していなかったことが明らかになっている。

＜サイド・クトゥブサイド・クトゥブの理論的支柱＞

- ◇ 世界は二元的な価値観(善と悪)に二分されている。
- ◇ 神の支配への服従と非服従: 信仰の無い世界は腐敗であり、ムスリムだけによる世界を構築しなければならない。
- ◇ クルアーンによって日常的概念と生活習慣のすべてを委ねなければならない。
- ◇ 政治も経済もすべての社会規範はクルアーンによって機能しなければならない。ジャーヒリーヤ(無明)の指導者や社会機構からは脱却しなければならない。
- ◇ イスラーム国家を即座に創造しなければならない。これは神からの指令である。
- ◇ 西歐化されたムスリム国家はクルアーンから大きく逸脱している。これらの国家を殲滅し真のムスリム国家を設立するためにはもはやジハード(聖戦)以外に方法はない。ジハードに参加することは全ムスリムの義務であり、それ以外の選択肢はない。これを拒む者は神の敵として殺害しなければならない。

●第三次中東戦争(1967年=6日間で終わったため「6日戦争」とも言われている)

イスラエル 対 アラブ連合国:エジプト、ヨルダン、シリア、イラク、サウジアラビア



▲1967年6月5日、イスラエル空軍機が超低空飛行でエジプト・シリア・ヨルダン・イラク領空を侵犯、各国の空軍基地を奇襲攻撃して計410機にも上る航空機を破壊した。この「レッド・シート作戦」によって制空権を奪ったイスラエルは地上軍を侵攻させ、短期間のうちにヨルダン領ヨルダン川西岸地区、エジプト領ガザ地区とシナイ半島、シリア領ゴラン高原を占領した。

ヨルダンとエジプトは6月8日に停戦、シリアも6月10日に停戦した。延べ6日間の電撃作戦でイスラエルの占領地域は戦前の4倍以上までに拡大した。

▲アメリカ始め欧米諸国はイスラエル支持、ソビエト連邦はアラブ支持の立場を取った。米ソは協議を行い、イスラエル軍の撤退と、アラブ側にイスラエルを承認させる妥協案をまとめた。しかし、国際連合総会への提出を前に、アラブ側が妥協案を不服としたため決議は行われなかった。こうした諸外国の対応の遅れもあり、イスラエルは占領の既成事実化を進めていった。

▲この第三次中東戦争の大敗と1970年代に入ってから経済的不安が中東全体にあふれ、イスラーム過激派組織が中東から北アフリカ各地で「雨後のキノコ」のごとく誕生した。エジプトではムスリム同胞団がクトップの理念を継承しなかったために「ジハード団」「タクフィール・ヒジュラ」などが生まれる。中でも「ジハード団」は政治や軍事の組織の中へ人員を送り込むなどして、過激さと戦略的知恵にたけた集団であった。

▲【ジハード団のイデオログであったムハンマド・アル・ファラジュ(1953～1982)が著した「忘れられた義務」によればジハード団はイスラム国家を即座に建設しようとした。イスラム国家の創設こそが、イスラムが現生に回帰する手段だからである。この目的は武力を用いるジハードによって達成される。ファラジュは、1981年のサダト大統領暗殺事件に連座して処刑された。彼はジハードは長い間無視され、見落とされてきたが、ムスリムにとっては義務なのである、と説いていた。

エジプトの無神論的な政府や支配者に対するジハードは正当化され、すべてのムスリムにとって義務なのである。イスラム国家の創設には、西欧の法の根絶とイスラム法の履行、そして不敬虔な政府を武力革命によって打倒することが必要である、とファラジュは唱えた。

又、イスラム教の伝統的なズィンミー「被保護民」の概念を拒絶し、イスラム世界を侵食するキリスト教徒やユダヤ教徒に対してはそのような義務はないというのがジハード団の主張であった。】

※宮田 律著「イスラム超過激派—戦慄思想の全貌—」より

※ズィンミー:キリスト教徒やユダヤ教徒に対しては同じ經典を共有する者として保護しなければならないという考え方。



●ウサーマ・ビン・ムハンマド・ビン・アワド・ビン・ラーディン(لاذن بن عوض بن محمد بن أسامة, Usāma bin Muhammad bin 'Awad bin Lādin, 1957年3月10日～2011年5月1日あるいは2日とされている)は、サウジアラビア出身のイスラーム過激派テロリスト。アルカーイダの司令官(アミール)。



▲ウサーマ・ビン・ラーディンの父のムハンマド・ビン・ラーディンは、イエメンのハドラマウト地方の貧困家庭の出身で、第一次世界大戦前に家族と共に、イエメンからサウジアラビアのジッダに移住し、1930年に荷夫から身を興し、ジッダで建設業を起業した。ファイサル国王の目にとまり王室御用達の建設業者となり事業は急成長を遂げ財閥「サウジ・ビン・ラーディン・グループ(SBG)」を柱とするラーディン一族を形成した。一族の巨額な財産分与が様々な方面に流出した結果、そのいくつかがイスラーム教原理主義テロ組織の資金源になっているとされる。グループは石油ブーム時代に建築業で財を成し、メッカおよびマディーナ(メディナ)のモスクの修理を任されるほど、サウード家と深く結びついている。

▲現在、「サウジ・ビン・ラーディン・グループ」は、アメリカ、アジアおよび欧州に多数の支部と子会社(60社以上)を有し、石油および化学プロジェクト、遠距離通信および衛星通信に従事している。グループは、50億ドル以上の資本を所有しており、その内、約3億ドルがウサーマの取り分だった。ウサーマは、スーダンの建設会社「アル・ヒジュラ」、イスラーム銀行「アシュ・シャマリ」の支配株も保有していた。これに加えて、投資財閥「タバ」を所有し、代理人を通して、ケニアで貿易会社、イエメンで器械製造会社、出版社、セラミック生産工場を監督していた。

▲ウサーマは、ムハンマド・ビン・ラーディンの10番目の妻でシリア生まれのハミド・アル＝アッタスの子(最初の男児)としてサウジアラビアのリヤドで生まれ育った。生年はウサーマ自身がアルジャジーラとのインタビューで1957年3月10日である、と述べている。アラブの部族社会では事業を拡大するためには事業を行う地域を支配する部族長の娘を嫁にもらわなければならない、ムハンマド・ビン・ラーディンは22回の結婚をし55人の子供を儲けることになったが、最初の妻以外はウサーマの母のように短期間で離婚している。ウサーマを始め妻子の大半は40代を過ぎて事業が拡大してからの子供たちである。ウサーマはその17番目の子である。ムハンマドは妻ハミドとウサーマ生誕直後に離婚、ハミドは同じ部族のムハンマド・アル＝アッタスと再婚し新しい夫との間に4人の子を儲けた。ウサーマはその新しい兄弟の頭として成長した。このためウサーマはラーディン族ではなくアッタス族の社会で幼少期を過ごし実の父とは一緒に暮らしたことがない。

敬虔なワッハブ派ムスリムとして育てられ、世俗の学校に通ったがエリート教育がなされた。ウサーマの実父・ムハンマド・ビン・ラーディンはウサーマが10歳の時に飛行機事故で死亡している。

背景を持つ国際テロリズムのネットワークを作り上げたといわれている。

ビン・ラーディンは 1992 年に密かにサウジアラビアを脱出、サウード家を攻撃し続けるビン・ラーディンに対しファハド国王による追放であったとも言われている。民族イスラム戦線のハッサン・アル＝トッラビの招きでスーダンに渡り、ハルツームや青ナイル川地域に軍事キャンプを設立した。財閥「サウジ・ビン＝ラーディン・グループ」からの資金が止まり、スーダン国内で建設事業を行うことで財政面を安定化させるとともに、アフガニスタンで共に戦ったジハード団の指導者アイマン・ザワーヒリーなどとの関係を深め、組織の拡大育成を行った。

▲オスロ合意に反発、反米闘争へとエスカレートしていく。1993 年にはボスニア・ヘルツェゴビナの市民権を取得し、サラエヴォなどでの紛争に主にスーダンからイスラムのムジャーヒディーンを送り込み、アルジェリア内戦では武装イスラム集団を支援する財政的な援助を行った。北米や西欧で偽造旅券を所持したアルジェリア人が次々に逮捕され爆弾テロの計画が露見。さらにイエメンやソマリアなど活動を広げた。

▲ビン・ラーディンが指導したアルカーイダの爆弾テロは 1992 年末のイエメンのアデンでのホテル爆破が最初とされる。

▲中東における自爆テロは 1980 年のイラン・イラク戦争でシーア派が行ったのが最初である。車爆弾を用いた自爆テロは 1983 年、レバノン内戦下のベイルート・アメリカ大使館爆破事件が最初である。さらにヒズボラによるベイルート・アメリカ海兵隊兵舎爆破事件が起こり 300 人を越える米兵・フランス兵が死亡した。米軍基地までもがテロの標的となった波紋は大きく、アルカーイダでもそれに習い、イスラム集団などと共闘して、世界貿易センター爆破事件(1993 年 2 月 26 日、ニューヨークの世界貿易センタービル(WTC)の地下駐車場で爆弾が爆発した事件)など世界各地で一般市民をも巻き込んだ無差別な爆弾テロを行っていく。

▲サウジアラビア政府は、1994 年にビン・ラーディンの国籍を剥奪、同時期にラーディン家は、ウサーマを一族から追放したとの声明文をサウジアラビア国内のマスコミに送っている。エジプトのホスニー・ムバーラク大統領への暗殺未遂事件を起こしたジハード団(EIJ)は 1995 年にスーダン追放となり、さらにアメリカ・サウジアラビアの圧力で、ビン・ラーディンもスーダン国内に居られない状況となり 1996 年 5 月にスーダンを出国し、チャーター機でアフガニスタンのジャララーバードに渡った。直後にサウジアラビア東部のダーランで米軍宿舎爆破事件が発生した。この頃がビン・ラーディン一派が最も苦境であったとされる。

▲アフガニスタンにビン・ラーディンを招いたのはアブドゥル・ラスル・サイヤフで、ソビエトとの戦いでジャララーバードにビン・ラーディンと軍事訓練キャンプを創設して以来の関係であった。アブドゥル・ラスル・サイヤフは、世界貿易センター爆破事件の首謀者のラムジ・ユセフやアメリカ同時多発テロ事件の起案者とされるハリド・シェイク・モハメドなどアル・カーイダの首脳たちに、ペシャーワルで軍事指導したことがあった。

▲ビン・ラーディンは、最初はハリス派の庇護を受け、ISI の資金援助で食い繋いだ。ジャララーバードがターリバーンの手に落ちると今度はターリバーンの客人となり、ムハンマド・オマルと緊密な関係を構築、アフガニスタン国内にアル・カーイダの訓練キャンプを設置していった。またアリアナ・アフガン航空をハイジャックしたことからそれを用いて現金やアヘン、武器、偽造旅券などをパキスタンやアラブ首長国連邦との間で効果的にやり取りすることが可能になった。1997 年にはイスラム集団を財政的に支援しルクソール事件を起こした。

▲同年、北部同盟がジャラーラーバードを圧迫するとカンダハール東部のカルナクに拠点を移した。同じ頃、マザーリシャリーフ攻略にターリバーンは失敗し大打撃を受けた。その窮地を救うためビン・ラーディンは数百人のアラブ兵を送り、1998年8月にはマザーリシャリーフのシーア派のハザーラ人住民 5,000人以上を虐殺したとされている(?)。



▲1998年2月にはユダヤ・十字軍に対する聖戦のための国際イスラーム戦線を結成し、「ムスリムにはアメリカと同盟国の国民を殺害する義務がある」「エルサレムのアル＝アクサー・モスクを解放せよ」というファトワをザワーヒリーと連名で布告した。ジェマ・イスラミアとも関係を深めた。8月7日にはタンザニアのダルエスサラームとケニアのナイロビでアメリカ大使館爆破事件を起こしFBIから訴追をうけた。

▲アメリカはビン・ラーディンをかくまっていたアフガニスタンのターリバーン政権に対しビン・ラーディンとアル・カーイダの引き渡しを求めたが、ターリバーンは応じなかったため、国際連合安全保障理事会において引き渡しを求める「国際連合安全保障理事会決議 1267」が採択された。ターリバーン政権はこれにも応じず、経済制裁が発動された。同年、ビン・ラーディンはアルジェリアでサラフィスト・グループの創設に深く関わった。クリントン政権はアメリカ大使館爆破事件の首謀者として同年8月、アラビア海の艦艇から巡航ミサイルでアフガニスタン東部ホーストにある潜伏先を爆撃したがビン・ラーディンは間一髪逃れたとされる。この頃、アルバニアにアル・カーイダは拠点を構築し、コソボでの戦闘にアル・カーイダ系ムジャーヒディーンが参加している。1999年、CIAとISIは共同で大規模なビン・ラーディン捕獲作戦を計画したが、パルヴェーズ・ムシャラフによるクーデターが発生し中断を余儀なくされた。

2000年、アル・カーイダは米艦コール襲撃事件をおこし、「国際連合安全保障理事会決議 1333」によって再度引き渡しが求められた。

▲ブッシュ政権は、2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロ事件の首謀者をウサーマ・ビン・ラーディンとアル・カーイダであると断定した。アメリカ政府の公式報告書(『9/11 委員会レポート』)によると、航空機を使用したテロ計画の発案者は、2003年に逮捕され計画の全貌を自白したハリド・シェイク・モハメドであり、ウサーマ・ビン・ラーディンは彼から計画を持ちかけられたという。

▲しかし、これについては確たる証拠はなく、自白したとされるハリド・シェイク・モハメドの証言だけである。ネオコンサーバティブの総帥ウォルフォヴィッツ(J・W・ブッシュ政権時の国防副長官)が、すべてブッシュ政権のロードマップ作成の為に構築した政治戦略によるという見解もある。

＜2001年9月11日ニューヨーク同時多発テロにおける疑問＞



- ◇ 警備の厳しいニューヨークやボストンの空港で、20人程のテロリストが武装兵器を隠し持ちながら、何故同時刻に機内へ入ることが出来たのか？ 空港内部に協力者が多数いたはずであり、これは空港警備体制に統率力を持つ人物が関与しなければ不可能なことである。アメリカ政府内部に精通している人物が関与していた疑いが浮上している。
- ◇ 何故世界貿易センタービルが目標になったのか？ この年の7月に世界貿易センタービルはロックフェラー財団の所有から他の人物に所有権が移転されていた。当時すでにロックフェラー家の重荷となっていた当ビルを高額の保険金をかけて何故転売できたのか？
- ◇ 国際的なテロ事件は数多く起きているが、歴史上かつてなく、又この時以降もこのような大がかりなテロは行われたことも、成功した例も、計画を練られていた形跡すらない。このニューヨーク同時多発テロ以外にはこの50年間全く例をみない。
- ◇ セスナタイプの小型機をほんの3か月程度の訓練を受ただけで、あのようなピンポイントの体当たり攻撃が、2機とも見事に成功できるのか？
- ◇ 近年の報告ではビルの崩壊は飛行機の突入によるものではなく、通常よく行われている専門業者によるビル解体と同じ爆発物が使用され、ビルの上部から一か所に崩落するように爆破設計された崩落であったとされている。又、崩落設計では航空機突入後3時間は崩落しないように計画されていたと報じられている。

- ◇ 何故ペンタゴンはあのような軽微な被害で終わったのか？如何にも「やらせ」と思われるようなアタックで終わっている。当時ペンタゴンにはネオコンのウォルフォヴィッツは不在だった。
- ◇ 当時も今もアルカイダが出来ることは、同時多発的に自爆テロを行う程度のことしか出来ていない。

＜ISIS (Islamic State of Iraq al-Sham:ダーイシュ)の抬頭＞

◆アブー・バクル・アル＝バグダーディー (アラビア語: أبو بكر البغدادي) は、サラフィー・ジハード主義組織 ISIS (Islamic State of Iraq and al-Sham＝イラクとシリアのイスラム国:アル・シャームとはシリアの異称)の指導者、自称カリフ。

ISIS は、かつてアルカイダに対する忠誠を表明しており、アルカイダ傘下の組織の一つに数えられたこともある。しかしアルカイダが 2014 年 1 月に発表した声明では、アルカイダと ISIS との関係性が明確に否定された。この声明に対しては、ISIS がアルカイダに「破門」されたとする見方もあった。その理由として、ISIS がシリアにおいて、同じくアルカイダに対する忠誠を表明するアル＝ヌスラ戦線との対立を強めていることが挙げられていた。しかし今年に入り一部のアルカイダ組織やアフガニスタンのタリバーンの一部が ISIS への共闘を呼び掛けているグループもある。



▲バグダードのイスラーム大学 (現在のイラク大学 (英語版)) でイスラーム学の学士・修士および博士号を取得している。2004 年 2 月にアメリカ合衆国に対する抵抗組織の設立に関与した容疑で拘束され、キャンプ・ブッカに収容される。2004 年 12 月に釈放されると、キャンプ・ブッカの仲間たちとともにアブー・ムスアブ・アッ＝ザルカーウィーらの活動に加わる。その後彼らの組織は「イラク・イスラーム国」と名称を改め、アミール (指導者) であったアブー・ウマル・アル＝バグダーディーの下ではウサーマ・ビン・ラーディンらアルカイダ幹部との連絡役を務めていた。アブー・ウマル・アル＝バグダーディーが 2010 年に殺害されると、その後を受けてアミールに就任した。

▲2014 年 6 月 29 日、ISISの建国とカリフへの即位を宣言した。イラクとシリアにおけるアルカイダの活動を統括しているとされるが、2014 年 2 月にアルカイダ側が、ISISとは無関係であると発表している。

アメリカ合衆国国務省は 2011 年 10 月 4 日、バグダーディーの拘束に繋がる有益な情報に対して 1000 万ドル (約 12 億円) の報奨金を支払うと発表した。

2014 年 11 月 8 日、アメリカ合衆国及び有志連合による ISIS に対する空爆により、イラク北部のモスルにて死亡または負傷したとの報道がなされたが、11 月 13 日に ISIS からバグダーディー本人による音声メッセージが公表され生存が確認された。負傷後は、治療を受けるためシリアに移動したといわれている。

※アミールは、アラビア語で「司令官」「総督」を意味する語で、転じてイスラム世界で王族、貴人の称号となった。



<上記画像はロイターからのものです>

<イスラーム思想と今後の世界との関り>

世界は今イスラーム圏における過激派に対しては、武力による制圧と殺傷による勢力の弱体化をするしか方法はないと考えています。国連にしても日本を含む先進各国も目指している方向はただ一つの方向にしか向かっていないといえます。

世界のリーダーと見なされているオバマ大統領はおそらく困り果てていることでしょう。何故なら彼は武力の行使は本質的に許容してはいない政治家であるからです。ただ一昨年(2013年8月)には、シリアのアサド大統領に対して空爆をもって武力行使することを決意したことがありました。それはシリア国内においてアサド自身が自分自らが統治する国内で、反政府勢力(自由シリア軍を中心とした勢力)を抹殺するために、一般市民が多く住む地域に無差別な化学兵器(サリン)を使用したからでした。私はこの時だけは大いにオバマの選択を応援したい気持ちになっていました。+





※この時使用されたサリンは国連決議によって廃棄とその監視が義務付けられていました。
しかし未だアサド大統領によって完遂されたという報告はなされておられません。

又、最近では新たな「樽爆弾」が無差別爆撃に使用されています。この樽の中には釘や細かい金属片が仕込まれ、殺傷能力は増強され、被害を受けた子供たちは体内に無数に打ち込まれた釘や金属片によって苦しめられています。



ダマスカス近郊・ジョバでアサドの化学兵器使用の為に亡くなった人々。この後ホワイトハウスでは緊急の会議が開かれ、アサド大統領への攻撃がオバマ大統領の決定事項として容認された。

+何故なら当時のシリア難民は100万人を超え、一般市民の死者も10万人近くになっておりました。ヨルダンやレバノン、イラク、トルコ各地に避難していた難民の方々の、身体の中から絞り出す懇願の姿を思い出していたからです。

もしあの時オバマ大統領の決断が実行され、アサド政権が倒れていたなら、今日すでに30万人近くの女性や子どもが亡くなることもなかったでしょう。現在ではシリア難民は国民の50%（約1000万人）が難民となり、600万人がシリア国内を彷徨い、400万人が近隣諸国やヨーロッパへ逃れています。

シリア国内では寒さを凌ぐ家もなく、路上やテントで飢えと寒さに震えておられます。国際支援はシリア国内へは届いていません。しかしお金もなく、国内を脱出することが出来ない人々が、飢えや寒さで亡くなっています。又、最後のお金を出してシリア脱出を図り、北アフリカから地中海を渡ってヨーロッパを目指す人々でも、古ぼけた難民ボートにすし詰めにされ、目的地に着く前に、船が転覆して命を亡くす人々も多くおられます。

2013年の秋、オバマ大統領がアメリカ一国でも実行するという決意を持ってきていたなら、数十万人の人々の命は救われていたでしょうし、シリア国外におられた難民の方々も安心して帰国し、再建の意欲に満ちた日々を、今頃は送っておられたことでしょう。又、ISISがシリア領内に入り込む隙もなく、国家としての形態を偽装することすら出来なかった筈です。それを思うと実に残念でなりません。

この時開かれた会議で真っ先に反対を表明したのがロシア・プーチン大統領でした。あの時のプーチンは如何にも平和愛好家のような顔をして、居並ぶ各国首脳に反対メッセージを滔々と述べていました。しかしその隠された手で、アサドにロシア製の戦闘機や戦車を売り続けていたのです。

昨年(2014年)クリミアを電撃的に領有したように、ロシアの地中海から大西洋に海軍を進出させるためにはクリミアの海軍基地は無くすわけには行かない場所です。又、黒海から地中海へ艦船が進出するためにはどうしてもトルコ・イスタンブールのボスポラス海峡を通過しなければなりません。どのように優秀な海軍を備えていても、一旦トルコに敵対されれば、クリミアを中心とした黒海にいる限りロシア艦隊は何の意味も持たな

ということになります。



これを回避する唯一の道がシリアの港を確保しておくことでした。今、地中海の島々・キプロスやレスボス島などはロシアの投資マネーがあふれ、超高級マンションやホテルが建設されています。地中海進出は日本の北方領土と同じく、ロシアにとっては海洋へ出るために欠かせない戦略上の最重要拠点なのです。

プーチン大統領の野望を含め、主要先進国は殆どが21世紀になった今も、軍事力による圧力が政治の舞台でも必須だと思ひ込んでいます。そして「経済発展を持続的に拡大させなければならない」という固定観念から逃れることが出来ず、その結果として国家間の経済格差を更に助長し、安倍晋三のような政治家がこれまで培ってきた日本の平和共存的政治シーンを崩壊させようとしています。

現今のような政治家が幅を利かせている限り、イスラームに見られるような国際的なテロリズムを皆無とすることは不可能です。イスラームの一つの系譜をみてきましたが、そこにあるのは、不合理な暮らしを余儀なくされているのは日欧米先進諸国の身勝手な疑似帝国主義であり、それらに対抗し、「ムスリムの安寧を実現するにはジハードしかない」という宗教的論理が、未熟な世界の若者たちまでおも引きつけてしまっているのです。

しかし、ムスリムの人々すべてがこのような過激思想を持って生きて来られているわけではありません。これら原理主義そのものを通り越して、過激さ故の存在を主張しているのは、おそらくは(これは推定するより他に方法はありませんので)、数パーセント(10%とみても1億5千万人になるわけですが)程度の人々だというのが、イスラーム世界と20年近く関わってきた私の実感です。

※世界の宗教人口推計によれば、1900年のムスリム人口は1億9994万人(世界人口の12.3%)であったが、1950年には3億1570万人(13.6%)とわずかながら比率は上昇した。そして筆者による推計によると、2000年のムスリム人口は12億7603万人(21.1%)、2007年は14億4956万人(21.7%)にまで大きく増加していた。その後のムスリム人口の変化を推計すると、2011年現在の世界のムスリム人口は、15億4897万人と世界人口の22.2%となり、その規模、割合とも21世紀に入ってから着実に増加している。

—早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University) —
店田廣文著: 人間科学研究 第26巻 第1号 29-39(2013)資料より。

しかし、世界で1億人以上もの人たちが、テロ組織の予備軍として生きておられる可能性があるわけで、この事実を謙虚に受け止めて行かなければならないのが事実ではないでしょうか。

【世界の主なイスラーム過激派の分布】



◀開けられるパンドラの箱: 宗教とは一体何なのか▶

どうしても避けて通れない道が今人類の未来の前に立ち塞がっています。アメリカでもフランスでもドイツでも、ムスリム排斥の気運が高まり、市民の間で連日デモが行われている映像が流されています。

現代の自由と民主主義が標榜されている代表的な民主主義国家で、この様なことは許されるのでしょうか。自分の言いたいことだけを言い、後は知らない・とにかく今我慢ならない不快さがあるから、相手のことなどお構いなく、自分の浅はかな主張だけを徒党を組んで練り歩く。

この様な姿は本来あるべき民主主義とは言えません。相手の立場になって物事を考え、真実を知り、そして理解を深め、対話を通して和解してゆく、という方法こそが真の民主主義といえるのではないのでしょうか。

▲イスラーム教の指導者で宗教機関「アズハル」のアハド・タイプ総長は、今回の後藤さん、湯川さん、の殺害に関して次のように述べています。(NHK BS1より)

「日本人 2 人の人質の殺害に関し日本国民と同じ強い悲しみや怒りを感じる。イスラーム教は異なる宗教への尊敬や慈悲などを唱える宗教である。ISISはイスラム教徒とは認められない。ISISに参加する若者たちはイスラムの教えを誤った形で実践している。宗教教育の内容を見直し、ウラマー(聖職者)達が各国を歴訪してISISの思想の危険性を訴え、過激思想の広がりを阻止するために新たな対策に乗り出す。」

▲もう一つ非常に大切な市民の言葉をここに書いておきます。(毎日新聞 2015 年 3 月 4 日東京版)より

「彼は名前はアブウサマと名乗る男性(26)で、トルコ南東部ジャンルウルフア郊外のアパートの一室で取材に応じた。「ISの手はトルコにも及んでいる」と語り、部屋の窓に新聞で目張りをしていた。携帯電話には、シリアで活動していたIS時代の写真が残されていた。ラッカの学校関係者のつてで探し当てた男性の証言は客観的で、確認可能な諸情報とも符合していた。

13年春。ラッカでアサド政権の支配が崩れ、ISら反体制派組織が割拠した。「どの組織も政権打倒を目標とし、その後のビジョンはなかった。だが、ISにはイスラム国家の建設という明確な目標があり、未来を感じた」。男性は13年6月、ISの戦闘員になった。」

「固定給はなく、戦闘に勝つたびに報酬を得た。14年春、東部で国際テロ組織アルカイダ系ヌスラ戦線を撃破した際には600ドル(約7万2000円)、シリア軍との別の戦いでは4日間で1500ドルを手にした。主要産業の農家の月収が250ドルというラッカでは、大きな収入だった。」

「ISでは外国人の処刑とは別に市民の処刑も日常的に行っている。戦闘員らに希望を募り、「犯罪者を処刑したい」と書いた紙にサインさせ、登録する。「志願しなければ忠誠心を疑われる。当日まで誰を殺すのかは分からない」。ISは、不信心者を殺せば天国に行けると説いている。」

「男性も登録し、14年初め、親欧米の反体制派武装組織「自由シリア軍」の「スパイ」とされた32歳の男性を銃殺した。「後悔はしていない。自由シリア軍は武器を密輸するなど腐敗している」

「だが、処刑は未成年者にも及んだ。昨年初夏、戦闘員の友人が「神を汚す言葉を口にした」14歳の少年を処刑した。傍らで号泣する母親。外国人戦闘員らの子供は棒で遺体をたたいたり、つついたりした。友人はその後、精神的に不安定になった。」

「同時期、北部アレッポ近郊のマンビジュへの遠征時にも15歳の少年の処刑に遭遇した。「70歳の女性から金品を奪い強姦(ごうかん)した」という。疑念を禁じえなかった。少年ははりつけにされ、のど元を浅くナイフで切られ、出血多量で死亡した。腹部には「強奪と強姦」という「罪名」を書いた布が巻かれ、3日間放置された。「母親が毎日、顔を水で洗い、水で唇をしめらせてやっていた。その姿が頭から離れない」

「幹部が「罪」と言えば信じる以外にすべはない。組織には忠誠心を試すさまざまな「踏み絵」が用意され、メンバーは相互に監視し合っている。「不信感を抱けば、自然と態度に出て周囲に感づかれる。今度は自分がやってもいない疑いをかけられて処刑される」

「男性は14年夏、アレッポ北部の村から徒歩でトルコへ脱出しようと決意した。密輸業者を装い、汚れた衣服に大きな荷物を背負って国境を目指した。途中、ISの検問所を通った。担当者は「見慣れない顔だ」といぶかったが、「最近商売を始めました。生きるためです。許してください」と言うと、通行を許された。

「取材の最後に、「イスラム国家の建設」を掲げる別の組織が現れたら再び入るかと聞くと、こう答えた。

「入らない。もう誰も殺したくない。毎日、悪夢を見て明け方まで眠れない。」

★信仰は、自分と神の間の問題なのだと感じている 【ジャンルウルフア(トルコ南東部)で大治朋子】

ここで一言:今回のISISの報道ではどの新聞社よりも毎日新聞が群を抜いていました。アフリカの風を連載していた朝日も今回はダメでした。他の読売、産経、日経などは全く海外通信社(ロイター、AFP、BBC等)頼みでした。私は殆どアルジャジーラとフランス24を流しっぱなしにしていたのですが、それよりも素晴らしかったのが、毎日新聞の記事でした。事前の取材努力とチームワークが如何に良く準備されていたかが分かります。記事や発信場所、そして画像なども信頼出来るだけでなく素晴らしいものでした。

◆さて、いよいよパンドラの箱を開けなくてはなりません。

宗教の話をするのはどのような時にも注意しなければなりません、それを抜きにしてはもはや世界を平和共存へと導くことが出来なくなりつつある今日、真正面からこの問題に向かって行かなくてはなりません。誰が「猫の首に鈴をつけるか」と言っているときではなく、宗教の持つ意味を再考するべき雄叫びをあげなくてはならない時に来ているというのが、21世紀を迎えた今だと位置づけしなければならないでしょう。今世紀末までには、宗教に対する考え方が大きく変化していることが望まれます。

◆ビッグバンから134億年、太陽系が生まれたのは宇宙形成の第三世代として今から64億年前、そして現生人類が誕生したのはただの数万年、これらの科学的な証明は明確にはじき出されています。そして、現代人が脳の中に獲得した知性は僅か4~5千年程度でしかないとされています。

その初期段階から、神秘や不可解な自然の営みに対して言いえぬ畏怖を常に感じながら人類は進化してきました。太陽の恵みと寒暖の差、突然訪れる地震や雷鳴、津波や火山の噴火、動物や植物たちの営み。それら余りにも不可解な現象に加えて、親子兄弟同胞達が遭遇する災難や死の恐怖。これらのすべての現象を受け入れる為には、大いなる何者かの力や意志が必ずある筈だと思った結果得られたのが、神の存在でした。畏怖の念を表し、平安な日々を過ごせることを願い、愛する人を失った時の悲しみを和らげる為に自然に人々の間に広まって行ったのが神の存在であり、シャーマニズムに色付けされ体系づけたのが現在の宗教だと言えるのではないのでしょうか。

◆そもそもこれらの畏怖や死に対する恐怖を持つ生命が地球に誕生したのは

・40億年前で、原始の海には生命に必要な有機分子(アミノ酸、核酸塩基、糖、脂肪酸、炭化水素など)が豊富に存在していたと考えられています。アミノ酸が化学的に離合集散しながら、しだいにたんぱく質と核酸を薄い膜の中に収め、自己の形を持ち増殖することが出来るようになったと考えられています。32億年前に光を使用することによってエネルギーとなる有機物を作り出す光合成細菌(シアノバクテリア)の出現。シアノバクテリアの直接の子孫にあたるストロマトライト(現在でもオーストラリアの西海岸のハメルンプールと呼ばれる浅い海で生息)。

・20億年前に本格的な真核生物の誕生。光合成細菌を取り込み、光合成能力をもった真核生物の中から植物へと枝分かれをしていくものが現れ、一方、光合成能力をもたなかった真核生物は積極的に栄養を取り込んでいかなくては行けないため運動能力を発達させ、動物へと進化。

・5.5億年前カンブリア爆発:カンブリア紀に動物進化史上最も重要な出来事が起こりました。それまで数十数種しかなかった動物が突然、500万年という極めて短期間のうちに数万種にまで爆発的に増加。

・4.1億年前、海中では魚類が繁栄し、オゾン層が形成され紫外線が遮断されて生命体が地上で活動出

来る環境となり、まず植物が地上へと進出。そしてエラ呼吸が出来る両生類を先頭に、動物たちも地上へと進出を開始。

- ・2 億年前には一つだった地上の大陸(パンゲア)が分裂を開始。恐竜の絶滅。
- ・1500 万年前:ヒマラヤやロッキー山脈の形成。この頃人と猿の共通の祖先が誕生した。
- ・およそ 20 万年前現生人類ホモ・サピエンスがようやく誕生。

◆大雑把に見ればざっと我々が地上に生まれるまでの歴史が以上ようになります。現代人の祖先達は凡そ 2 万年前位にアフリカを出てシナイ半島をへて今のイラク近辺・チグリス・ユーフラティス川沿いに住みつき、メソポタミア文明を開化させました。元は 200 人位の集団だったとされています。今の私たちの祖先はみんな同じ釜の飯を食べた仲間だったのです。

◆さて宗教の話に戻しましょう。地球の生命の歴史をみてきたのは、私たちのDNAの中にはこれらすべての歴史が刻みこまれているからです。海中に生きていた時代から持っている、生命を持ったがためにもつ死への恐怖感。これが私たちの脳に繋がる脳幹の中にしっかりと息づいています。これこそが宗教を賛美する原動力となっています。宗教における神の存在とは決定的な、あるいは客観的な存在としての真実ではありません。

◆宇宙に存在する最少物質は素粒子と表現され現在では以下のように分類されています。

ボソン(ボース統計に従う粒子)

▲ゲージ粒子

素粒子間の相互作用(力)を伝え運ぶ粒子。それぞれの相互作用に応じて以下の種類がある。

- ・光子(フォトン) - 電磁相互作用を媒介する。ガンマ線の正体であるため γ で表されることが多い。
- ・ウィークボソン - 弱い相互作用を媒介する。質量を持つ。
 - +W ボソン - 電荷 ± 1 をもつ。W+, W-で表され、互いに反粒子の関係にある。
 - +Z ボソン - 電荷をもたない。Z0と書かれることもある。
- ・グルーオン - 強い相互作用を媒介する。カラーSU(3)の下で八種類存在する。
- ・重力子(グラビトン) - 重力を媒介する(未発見)。標準模型には含まれない。

▲ヒッグス粒子

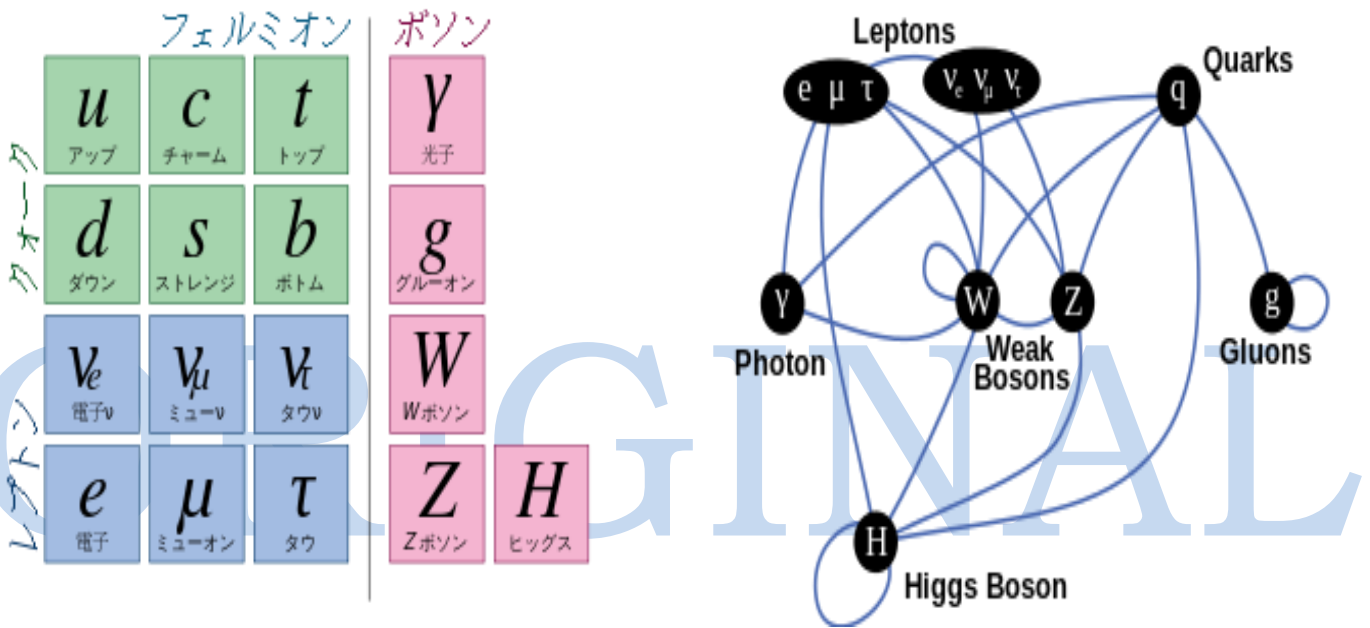
素粒子に質量を与える。

▲フェルミオン(フェルミ統計に従う粒子)

物質を構成する粒子。クォークとレプトンに大きく分けられる。更にそれぞれが二系列に分けられ、三代ずつの計 6 種類が発見されている。傾向として、世代数が大きいほど質量が大きいとされている。

- ・クォーク - 強い相互作用をする。ハドロンの構成要素とされる。
 - 上系列クォーク - 電荷 $+2/3$ を持ち、それぞれに反粒子が存在する。
 - +アップクォーク (u)
 - +チャームクォーク (c)
 - +トップクォーク (t)
 - ▲下系列クォーク - 電荷 $-1/3$ を持ち、それぞれに反粒子が存在する。
 - +ダウンクォーク (d)
 - +ストレンジクォーク (s)
 - +ボトムクォーク (b)

- レプトン - 強い相互作用をしない。
 - ニュートリノ - 電荷をもたない。標準模型の範囲では反粒子の存在が必然ではない。
 - +電子ニュートリノ (ν_e)
 - +ミューニュートリノ (ν_μ)
 - +タウニュートリノ (ν_τ)
 - 荷電レプトン - 電荷-1を持ち、それぞれに反粒子が存在する。
 - +電子 (e) - 原子の構成要素として一般によく知られる。電子の反粒子は陽電子と呼ばれる。
 - +ミュー粒子 (μ)
 - +タウ粒子 (τ)



◆量子力学の世界では今人類に於ける最高の頭脳を持つ人々が集まって、宇宙の創生とビッグバンが起こった原因、そして我々が存在する宇宙がこれからどのように成って行くかの研究と数学的知見が積み重ねられています。

スイスのアルプスの地下に造られた欧州原子核研究機構(CERN)では、まさに人類の叡智とハイテクノロジーが集積され、地下 100mには 全周 27km の円形加速器・大型ハドロン衝突型加速器 (LHC) が、国境を横断して設置されています。

一昨年、CERNのメンバーが、今スイスにある実験施設を上回る一直線のLHCを創るための場所を求めて東北の北上山地を視察に訪れました。日本では飛騨高山のカミオカンデにノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊教授のニュートリノ実証の為の施設が地下 1000mのところに設けられています。又、このカミオカンデと筑波研究都市とを地下で結んで素粒子の衝突実験が行われてもおります。

世界に二つとない研究施設が東北に創られれば、震災復興の東北の地の再生にはこれ以上ない素晴らしい計画と期待しておりましたが、日本政府の口からは原発再稼働のような余りにも情けない言葉がこぼれ出るだけです。何ともやりきれない思いがつのります。

◆地球の歴史と量子力学は、過去と未来を考察し、哲学倫理を構成する

今、量子哲学という分野が形成されつつあります。ギリシャ哲学以来人類はあらゆる学問を創出してきました。「人は何故生きるのか」という答えは近代の哲学において結論を出さぬままに人々の関心から遠ざかってしまっています。量子哲学とは「素粒子にも意志がある」「人間の心を量子ではかれるか」などという分野にまで発展しつつある学問です。

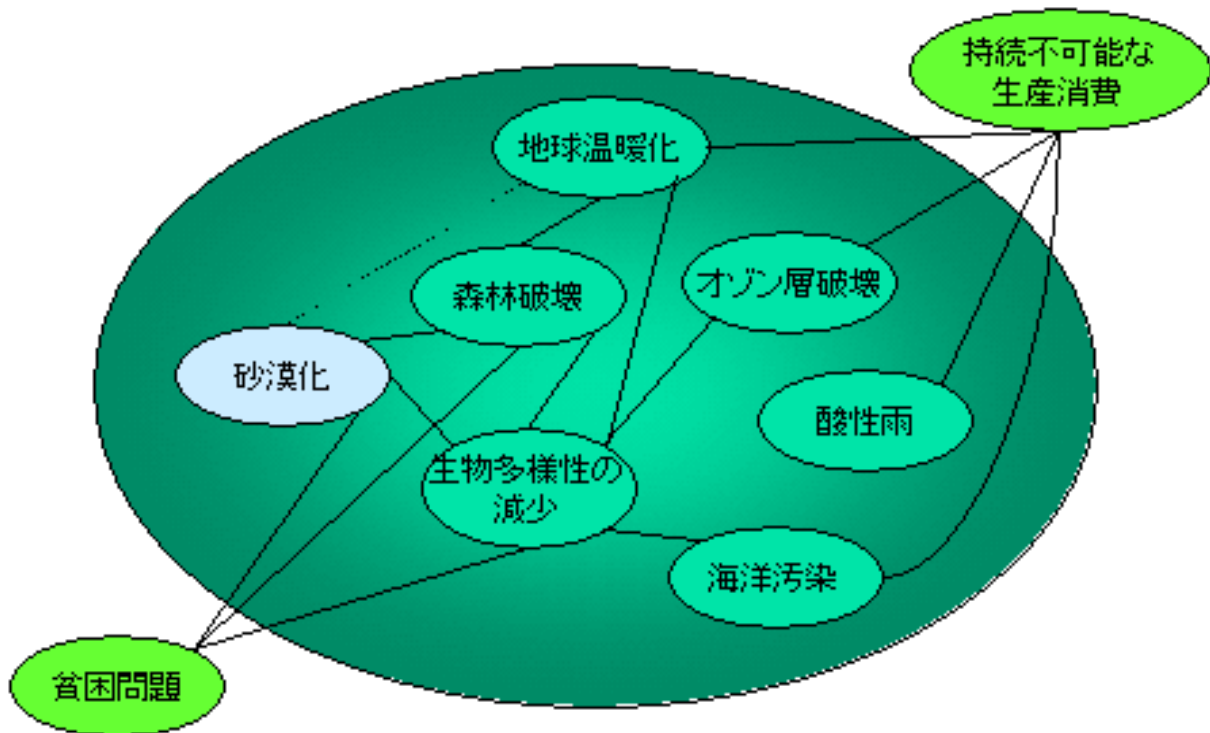
言い換えれば、「神の世界は実在しない」「天国や地獄は人間の感性脳の中だけで創造され、人類の脳の中にだけ存在する世界である」ということを証明する学問であり、それを数式で証明しようと試みられています。

▲イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教などの一神教も、すべてに仏が宿るとする仏教も、心の中にだけ存在を許容されているということであり、「神の存在を社会通念として共有すべきものではない」、ということです。社会通念として保持しなければならないのは、存在する全生命の大切さであり、同時に健全な存在を可能とする倫理観でなければなりません。又、同時に地上の全生命を育てている地球環境をこれ以上低下させてはいけないという根本原理にも繋がっています。このことは次の三項目にもあてはめて考えなければなりません。

すなわち

- ①ISISがイスラーム教の原理に基づいた国家を作らんがために、多くの人々の命を事もなげに抹殺していますが、そのような社会原理は何処にも存在しません。最優先されるべきは、一人一人の命です。
- ②地上に生きるすべての命が存在する権利を持ち、存在する価値を持っているのです。植物も動物も昆虫も何もかも、付与された命ではなく、存在すべき意義を持って生まれてきています。
- ③人類の平和共存とはあらゆる意味での格差(貧富、男女、人種、他)をなくすことが前提です。

問題群としての地球環境問題



◆私が言いたいことはただ一つ・神は存在するものではなく、まして信仰を強制するものでもなく、ただただ信じる人の心の中にだけ存在するものだということです。

アブウサマさんが言った言葉「★信仰は、自分と神の間の問題なのだと感じている」(20P)

これこそが宗教の原点だと言いたいのです。

人夫々が自分の信仰する宗教を心の拠り所として生きてゆく。そこには強制も覇権も布教もなく、自らが苦しみや悲しみの中から、あるいは平安を望む気持ちから、ある特定の宗教を受け入れる。そして自分だけでなく同時代を生きる人々とすべての平和を、生きる喜びを共有する。その為だけに宗教は存在するということを認識して欲しいのです。

※宗教が政治に介入してはなりません。この意味で公明党は政党として即失格です。まして今のような自民党にすり寄り、平和憲法を守ると言った口先の乾かない内に、集団的自衛権や特定秘密保護法を成案させるなどはもっての外です。日本の未来を台無しにしまいました。この先憲法 9 条改悪を阻止しようとしなければ、公明党は安倍自民とともに日本の政治史に大きな汚点を残すことは明白です。

◆宗教問題の最後の言葉として

私は長年イスラーム圏の難民孤児達を支援して来ました。それはロシアがアフガン侵攻を始めた頃から始め、現在も続けております。しかし難民孤児達を育てて行くのはタリバーンやアルカイダなどへの配慮も欠かすことが出来ず、大変な注意も必要です。孤児たちの多くは世界の各地で今では活躍してくれている者もいます。この活動をして多くの事を学ばせていただきました。それは商社にいた頃より比較にならないほど大切なことばかりでした。

今、ますますムスリムの人たちが肩身の狭い思いをされております。しかし、宗教における原理主義というのは実に厄介なものです。シオニズムしかり、アメリカの福音派しかりです。アメリカの中西部における共和党の支持基盤となっている福音派の人々の中には、未だに科学を信じるより神を信じる、という方たちも沢山おられます。シェールガス発掘の為に出る真っ黒な飲み水に冒されていても環境汚染とは思わず、神の御心故だから、やがてきれいな水に神が変えて下さる、という人々がおられるということは全く驚きです。

ついでに言わせて戴ければ、来年始まるアメリカ大統領の予備選から秋の決定まで、私自身何とか共和党候補だけには勝たせたくはありません。おそらくブッシュ前大統領の兄弟が出るようですが、彼だけには大統領になってほしくはありません。今の安倍晋三と同様、過去の「強いアメリカ」指向の大統領が生まれ、世界は更に戦争の道へとヒートアップされてしまうと思うからです。年は少々いってしまいましたが、出来ればヒラリー・クリントン女史に初のアメリカ女性大統領になって欲しいものです。オバマ大統領は決め手に欠けましたが、コングロマリット企業が巣食うロビーの中で、環境問題関連の法案だけはかなり実績を積んだ気がします。

私は今回宗教問題について正面から意見を述べさせていただきました。これは、現在私が取り組みつつあるある組織—BCIJ (Buddhism, Christianity, Islam, Judaism) 協会—のことを念頭に於いて書かせていただきました。イスラーム問題が世界に様々な難問をもたらしている今、平和共存を果たすには、このような協会での対話こそが、解決への大前提だと考えております。